



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

# NEWS LETTER

特集

フランク・ロイド・ライトと  
常滑の装飾タイル

vol. **03** | 季刊 春  
2007





表紙写真

光る雲に春の気配を感じる日、INAXライブミュージアムに保育園の子どもたちが遊びに来てくれました。きちんと整列して館内を見学したあとは、窯のある広場で走り回って、元気に遊んでいました。(2007.3.7)

【特集】 フランク・ロイド・ライトと常滑の装飾タイル

02 対談 ライトがつくった土のデザイン

06 INAXの原点を見つめる  
ものづくり工房で  
帝国ホテル旧本館の装飾タイルを再現

LIVE REPORT

07 開催報告  
「土と水のドナウ紀行」関連イベント  
牧神の笛 パンフルート コンサート&制作体験  
どろパステルらくがきコンテスト 発表  
愛知県の第12回「人にやさしい街づくり賞」を受賞

LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

常滑から

2

屋根の上のしょうき 鍾馗様



名鉄常滑駅からライブミュージアムまで、私はよく歩きます。常滑で生まれ育ち生活して40数年、見慣れた路地、家並みのはずなのに、歩くとたびに新しい発見があります。自動車で移動しては、気づくことができない発見、得をしたようであれしくなります。なかでも最近気になっているのが、「屋根の上の鍾馗様」です。

お寺や近所の鬼瓦の睨みを棟側で受けるとその家は衰退してしまふと言われていました。それを恐れ、鍾馗様を棟側に立て睨み返すのだとおじいさんから聞きました。沖縄のシーサーと同じで魔除け、厄払いの意味もあるそうです。鍾馗様がどんな人だったのかは土ごころんご館2階の「百土箱」で紹介したいと思っています。

磯村 司

(陶業工房 工務長、土ごころんご館ワークショップ 担当)

※ INAXが生まれ育った常滑のやさもや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



【特集】 フランク・ロイド・ライトと常滑の装飾タイル

装飾タイルと大谷石で華麗な外観を誇った「帝国ホテル旧本館」。20世紀建築界の巨匠、フランク・ロイド・ライトの作品の一つです。壁面を彩った装飾タイルが、愛知県常滑市で焼かれたのをご存知でしょうか？時代はまさに、建築用陶器の工業生産、量産への胎動期。そこには、タイル生産にかけた人々の熱い思いとロマンがありました。





# ライトがつくった土のデザイン

フランク・ロイド・ライトが、帝国ホテル旧本館で表現したものは？  
 壁面を飾ったタイルが、常滑のやきもの産業にもたらしたものは？  
 ライト研究の第一人者である谷川正己先生に、辻孝二郎館長が問いかけます。

谷川 正己  
 (建築史家・工学博士)

辻 孝二郎  
 (INAXライブミュージアム館長)

ライトが求めた淡い色彩の煉瓦

辻 帝国ホテル旧本館というと華やかな装飾に目が向きますが、色彩にも注目したいですね。当時は東京駅はじめ、赤煉瓦の全盛期。しかし、帝国ホテル旧本館の装飾タイルは黄色です。フランク・ロイド・ライトは、どうしてあの色を選んだのでしょうか。

谷川 彼は形だけが芸術作品をつくるとは考えていなくて、色は大きなファクターでした。

初期の頃にライトがどういう色を使っていたか、息子のロイド・ライトが頭の中に染み込ませていた色を、シカゴの隣町オーク・パークに建つユニテリアン教会に塗ってみたいことがありました。すると、まあ、緑でも若葉色とか萌黄色とか薄い。赤でも黄色でも、これは水彩絵の具でもう一度塗り直さないと色が出ないんじゃないかというくらい薄いんです。そして淡い落ち着きのある色を好んだようなんです。ライトは風貌に似ず、実はたいへんデリケートで繊細な性格の人だったと思いますね。

外壁は、帝国ホテル旧本館の顔を決定的に印象づけるものだから、非常に慎重に色を決めていこうとしたでしょう。それに彼は、赤煉瓦の建物のように、襟を正して入っていかねばならないような建物をつくる気はなかった。色が淡い煉瓦を選ぶのは、可能性として十分あると思います。

辻 ライトの求めに対して、「果たして黄色い煉瓦などあるだろうか」という話になったところ、帝国ホテルの重役の一人、村井吉兵衛氏の別荘に黄色い煉瓦が張られているという。その煉瓦を納めた者はだれかというところから、常滑の職人・久田吉之助にたどりついたと書いてある本があります。知多半島に、黄色く焼ける土があったんです。

谷川 何とかして誇りの持てる、良いホテルをつくりたいという関係者の思いがあったんでしょうね。

辻 今回、INAXライブミュージアムでは企画展「水と風と光のタイルーF・L・ライトがつくった土のデザイン」(4月14日(土)~9月30日(日))を開催しますが、それは、私とスタッフの「もう一度、帝国ホテル旧本館の装飾タイルの土を探してみよう」という話から始まりました。2005年11月頃です。

およその地図があったとはいえ、粘土を探さなんて不可能に近い。でも、初めて山に入った日、当時、土を提供していた原料屋のお孫さん、竹内七志朗さんが、閉山していた原料山を再開している現場に遭遇したんです。偶然とはいえ、本当にうれしかったですね。当時と同じ土を使って、ライトのデザインした装飾タイルを再現してみよう、ということになりました。

およその地図があったとはいえ、粘土を探さなんて不可能に近い。でも、初めて山に入った日、当時、土を提供していた原料屋のお孫さん、竹内七志朗さんが、閉山していた原料山を再開している現場に遭遇したんです。偶然とはいえ、本当にうれしかったですね。当時と同じ土を使って、ライトのデザインした装飾タイルを再現してみよう、ということになりました。

定規とコンパスで徹底した造形

辻 帝国ホテル旧本館の装飾タイルはライトがデザインし、常滑の陶工たちがこれを忠実に再現しようとしたと理解していいですか？

谷川 そうですね。もちろん、デザインはライト。凹凸のある幾何学的なデザインです。

ライトの先生であるルイス・ヘンリー・サリバンは、フリーハンドの絵が非常に上手でした。そういう先生を彼は尊敬しています。大学で勉強していないライトは、サリバンのところで見よう見まねで建築家になっていったんですからね。敬愛の念はもっているんですが、ライトは何とかしてアメリカのナンパーワンになりたい。そのためには、師を超える手法を自分で開発しなくてはならない。そこで、定規とコンパスを持つんです。そこから外れないように、徹底的に造形していく。

デザインとしては、日本人が見ると、ちょっと脂っこいと思われる方もいらっしゃるでしょうが、全体として見た場合には、そんな



P.1の写真  
 上:ロビー・ホールの光の廊柱(帝国ホテル旧本館 撮影=村井修)  
 下:工事関係の幹部 前列右から3人目がライト 1920(大正9)年頃(写真:放牧口誠司郎)

Photos are Courtesy The Frank Lloyd Wright Foundation, Talliesin West, Scottsdale, AZ.

▶帝国ホテル旧本館  
 1890(明治23)年に開業した帝国ホテルの新館として1923(大正12)年に完成。設計はアメリカの建築家フランク・ロイド・ライト。総面積34,000㎡余で、中央に玄関、大食堂、劇場などの公共部分、両翼に客室(270室)、地下にはプールが配されていた。老朽化のため1967(昭和42)年、惜しまれながら解体開始。中央玄関が博物館明治村(愛知県犬山市)に保存展示されている。



谷川正己  
 Tanigawa Masami

1930年生まれ。大阪工業大学工学部建築学科卒業。元日本大学工学部教授、工学博士。谷川正己フランク・ロイド・ライト研究室主宰。1998年、「Frank Lloyd Wright研究に関する一連の業績」で、日本建築学会賞受賞。著書に「フランク・ロイド・ライト」「ライトと日本」、訳書に「ライトの遺言」、ほか多数。



谷川正己先生と辻孝二郎館長(INAXライブミュージアムにて)





「帝国ホテル煉瓦製作所」全景 1917(大正6)年~1921(大正10)年頃  
専用の棧橋があり、大量のタイルは250トンから300トンの帆船で運んだ。三重県の矢野で風を待ち、風が出ると一気に東京まで一昼夜で、風によっては1週間くらいかかった。



上:帝国ホテル煉瓦製作所幹部と従業員一同  
1919(大正8)年5月16日撮影 中:スクラッチタイルの制作風景  
下:正面から見た窯場 (このページの写真:故牧口巖司郎贈)

なにしつこいものではない。アクセントに使っているんですからね。面白いと思います。

### 生産現場の葛藤

辻 使われたタイルやテラコッタ、煉瓦の数は、400万個以上と言われています。

谷川 タイルが「工業製品」と位置づけられたわけです。

辻 帝国ホテルは直営の煉瓦製作所を開設し生産を始めました。ところが、なかなかうまくいかない。当時の技術顧問は、還元焼成<sup>※1</sup>を採用していました。しかし黄色く焼くためには酸化焼成<sup>※2</sup>が必要なんです。常滑には、「真焼け」といって空気をたくさん送り込んで真に焼くという、土管を焼く技法が昔からありました。この焼き方は酸化焼成そのものなのです。久田はその焼き方を知っていたはずなんです。

谷川 秘伝ですからね。

辻 久田は、武田五一の設計で明治42年に竣工した京都府立図書館のテラコッタも作っています。これを見るとまさに黄色のやさきものですし、ある陶芸家が「素晴らしい芸術作品だ」とおっしゃっています。

数も40人前後。しかも、ほとんどが若い人たち。今、ものづくり工房で装飾タイルの再現をしていますが、一生懸命にやっても一人一日に9個しか作れません。昔はどうやってたのか。技術云々というよりは、機械と同じように単純作業を繰り返すだけだった感じですね。スクラッチタイルでも、線の勢いが全然違います。昔のはすこい力で一気に作っている。

谷川 ただ、ライトはできあがった製品にあまり文句を言わずに使っていた。ということは気に入っていたということでしょう。

辻 “Very good”を6回言った、と書いている本もありますが、谷川 “Very good”だけが聞きとれたんでしょう(笑)。

### ライトの建築に学ぶ

辻 帝国ホテル旧本館は過飾とか無駄が多いとか言われますが、装飾が機能になっているデザインです。実際、装飾タイルは光や風を取り込むデザインとして、また水を流す樋などにも使われています。

谷川 だから、ホッとするんです。透かし彫り煉瓦のシェードがあるから、光源が直接見えない。どこからか光を入れて、ほんのりと部屋全体が明るくなる。

辻 われわれは、ライトの建築から学ぶことが実に多くありますね。

谷川 「有機的建築」と、ライトは言いました。彼は日本に来て、アメリカとの違いにびっくりしたんです。日本は自然と手をつないで融和できる穏やかな国だと。自然をもう少し大事にして、今の環境で良いのかももう一度考え直すのが、有機的建築というものだというわけです。

“Nature of nature.” 僕の好きなライトの言葉です。自然の摂理をわきまえないと、人間は窒息してしまいますよ、という言葉。ライトは、有機的建築という無駄の多い、何だか採算の取れないことにも一生懸命になっていた。それが結局、今盛んに言っている「潤い」とか「癒し」につながる。機能一点ばり、あるいは合理性で説明のつかないものはだめという考え方はやめて、ゆっくりにしようじゃないかと。そういう人間の回復に、ライトは心を砕いていた。今まで、それを思い返すのが遅れたのだと思います。

やったほどの仕上がりです。そんな彼には、大量生産ということに抵抗があったのではないかと推察してもいいんです。当時の常滑のやさきもの生産現場は、まだ小さい工場の少量生産でした。まさに、家業から事業への転換期だったと思います。

### 大量生産への過渡期

辻 帝国ホテル煉瓦製作所は大正6年に、技術顧問が伊奈初之丞に代わりました。実質は息子の伊奈長太郎(後に、長三郎を襲名が担当したと言われています。現INAXの創業者です。彼らは、大量生産の技術を試行錯誤しながら、帝国ホテル旧本館のタイルを制作していった。その後、常滑では建築タイルの生産が発展していきます。

谷川 ライトは積極的に工業生産、大量生産をやらせています。手仕事が良いとは特に言っていない。帝国ホテル旧本館で実際に使われたスクラッチタイルと、明治村に移築した帝国ホテルで補修に使われた工業製品のタイルを比べたら、ライトはどちらを褒めただろうと考えるんです。

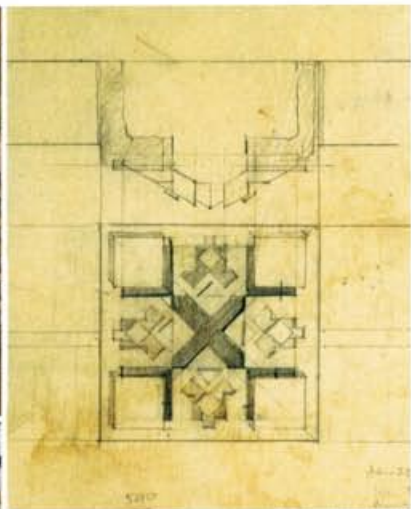
辻 当時の常滑は、建築陶器の大量生産体制はなくて、職人の

辻 ヨーロッパでは、「未来は背中にある」と言います。過去から学ぶ、その流れの先に未来がある。われわれも、土をめぐる新しい試みをずっとやってきました。が、今一度、原点の土に戻って、その頃の風景を見つめることで、見えてくるものがあるという気がしています。(2007年2月26日収録)

※1 燃焼に必要な酸素の供給が不足して、不完全燃焼の火災による焼成

※2 酸素の多い完全燃焼の火災による焼成

### ライトがつくった土のデザイン



右上:ライトがデザインした照明・換気用のテラコッタの図面  
Drawings of Frank Lloyd Wright are Copyright ©2007 The Frank Lloyd Wright Foundation, Taliesin West, Scottsdale, AZ  
右下:照明・換気用のテラコッタ(博物館明治村)  
左上・下:博物館明治村



## ものづくり工房で

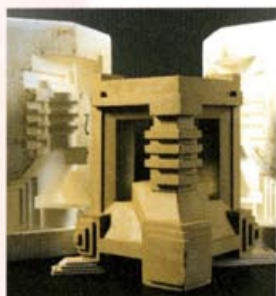
# 帝国ホテル旧本館の装飾タイルを再現

帝国ホテル旧本館を飾ったタイルの原料は、「内海粘土」という土。知多半島の先端に近い内海で採掘されていた。幸運にもその土を手に入れることができ、ものづくり工房のマイスターたちによるタイルの再現が始まった。

ものづくり工房は、INAXが新しい製品を作り続けていくために、原点に立ち返り、そのものづくりの心を見つめていこうという場所。INAXの前身である伊奈製陶(株)の創業と深い結びつきをもつ帝国ホテル旧本館の装飾タイルの再現は、まさに、INAXが「やきもの」から始まったという原点を見つめ、継承し、発信する取り組みだった。

ライトの図面を追い、型を作り、焼き上げる。「過去の職人がどんなやり方をしたか想像しながら作る。昔に近いかたちでやりたいから」とマイスター。一連の再現作業で、当時の職人たちの苦労を実感するとともに、装飾と機能を併せ持つライトのデザインに改めて感動したと言う。

再現されたタイルは企画展「水と風と光のタイル」に展示される。ぜひ、そのデザイン、質感をさわって確かめてほしい。



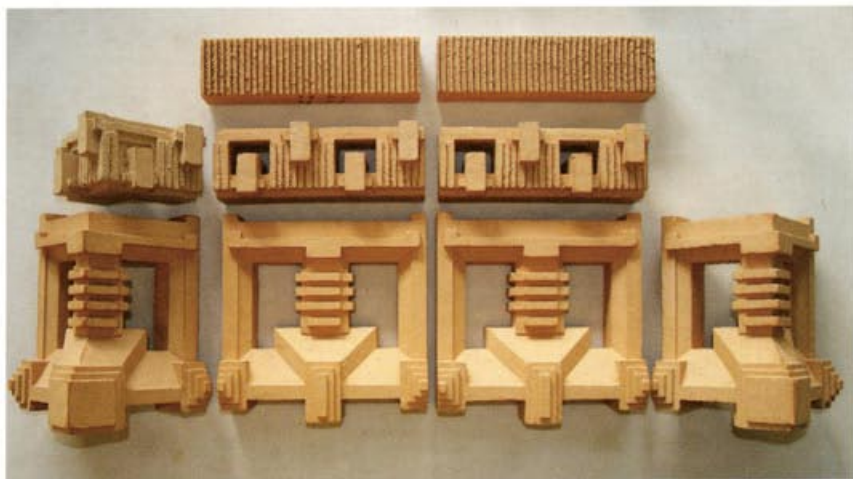
帝国ホテル旧本館に使われた装飾タイルを再現するため、現物から寸法を探り石膏型をつくる。その型を正確につくるのが第一歩。



型に粘土を詰める。「このデザインは線が命。はっきり言ってむずかしい形だね。当時の職人の気持ちが伝わってる」とマイスター。



線を整え、補修する。



再現された装飾タイル



上:タイルにスクラッチ模様をつける道具も当時の写真から復元。この手作業が一丁一丁の味わいを出していた。

右:当時、一番困難だったのが焼成。職人たちは色を出すのに試行錯誤を続けたという。現在は10℃ごとに差をつけて焼いたテストピースで、最適な色を決めて焼成する。

